

ラフカディオ・ハーンの間観

先川, 暢郎

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

86

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

13

(発行年 / Year)

1993-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004713>

ラフカディオ・ハーンの間人観

先 川 暢 郎

1. はじめに

ラフカディオ・ハーン (1850—1904) には、『英文学史』という著作があるが、これをみていくと、思想家、作家、詩人に言及している箇所があちこちに見受けられる。しかも、文章のみならず、それぞれの人達の職業、経歴 (生い立ち) などをふくめて評論しているのである。

例えば、歴史家として、エドワード・ギボン (1737—1794) を取りあげ、その文章の簡潔さにおいては、古典詩の最もすぐれたものに似ているとしている。また、ウィリアム・シェークスピア (1564—1616) の非凡な点は、無教育であったが質の高い立派な作品を書いたとしている。サミュエル・ジョンソン (1709—1784) については、それほど才能が豊かではなかったが、文筆で身をたてることができたのはまさにその人柄によるとしている。

小論においては、ハーバート・スペンサー (1820—1904)、ロバート・バーンズ (1759—1796)、ダニエル・デフォー (1661—1731) の3人を取りあげ、ハーンが彼らをどのようにとらえているかを見ていくことによって、ハーンにおける好ましい人物像をうきあがらせたいと思う。まずは、ハーンの経歴を概観することから始めることにする。

2. ハーンの経歴

1850年に父チャールズ・ブッシュ・ハーンと母ローザ・カシマチの間に生まれたラフカディオ・ハーンは、1856年、6歳の時に両親の離婚により、大叔母のサラ・ブレナンに引きとられて養育された。そして、12歳ごろにフランスのノルマンディ地方にあった神学校のイープトウ校に入学したが、カトリックの厳しい規則に耐えきれずに中退した。その後、1863年に帰国して、イギリスのダラム州にあるカトリック系のセント・カスパート校に入学した。

学校時代のハーンについて当時の同級生は次のように述べている。

少年にしては立派な詩を作り、また、非常な読書家であった。……少年にしては想像力は非常に進んでいた。学生としては、英作文だけは抜群であった。初めて英文を作った時はクラス一番であった。外の学科は中位か、それ以下であった。もっとも、英作文の外は別に勉強もしなかったようであった。……想像力を養成整頓するのに全時間を費していた。考えは斬新奇抜であったので、どの方面へ行っても発展するだろうと思われた¹⁾。

そして、大叔母はハーンが多大な財産を相続できるようにしていたのだが、遠縁にあたるヘンリー・モリニュークスに利用され財産の大部分をなくしてしまったために、1867年、4年間、在学したカスパート校を退学しなくてはならなくなり、ロンドンに行くことを思いたったのだった。

当時のことについて次のように語っている。

あなたの手紙はロンドンでの私自身の少年時代を思い起させました。私はお金持ちの子としてそこにいたことがある。そして、貧乏人としてそこにいたことがある。十四、五歳の時にはロンドン西部にいました。きちんとした気持のいいお坊っちゃんたちと一緒にいた。十七歳の時、私は突然たいへん貧乏になり、将来の見通しもないままロンドンにいました。その時は古いブラックフライアーズ橋の近くに住んでいた。そして、孤独な日々と孤独な夜々をテムズ川の畔りを長い間歩きながら過ごしたものです²⁾。

その後、1869年、19歳で渡米し、種々の職業を転々としてどん底生活を体験した。

当時の様子について、ハーンはバヂル・ホール・チェンバレン(1850—1935)に次のような手紙を書いている。

19歳の年に、私は一文無してアメリカのとある舗道に放り出されています。苦しい目に会いました。道端で眠ったりしたこともしばしばでしたし、召使、給仕、印刷屋、校正係、雑文屋として働きながら、少しずつ追い上がったのです³⁾。

その不幸なハーンを救ったのは印刷屋を経営していたイギリス出身のヘンリー・ワトキンソンであった。そして、そこで働きながら、自由な時間を利用して図書館で本を読み、また、新聞、雑誌に原稿を書くこともおこたることにはなかつた。

1874年、日刊新聞『インクワイラー』紙に彼の書評が掲載されると、彼の美しい文章が評判となり、正式に記者として採用され、地位、仕事、定収入を手に入れた。1875年に、混血の黒人女性マッティ・フォーリーとの同棲生活がもとで、『インクワイラー』紙の記者を解雇され、1876年に『コマーシャル』紙に入社し、古書、東洋関係の資料を集めたり、ゴーチェの怪談を訳したりした。しかし、1877年に『コマーシャル』紙を辞して、ミシシッピー州ニューオリンズに移った。そして、1878年に創刊されたばかりの小新聞である『デイリー・アイテム』紙に入社し、週給10ドルで社説、評論、書評、翻訳などを担当する編集助手としての仕事についた。その後、1879年には食堂を開店するが失敗し、ニューオリンズに嫌気がさし、日本行きの希望をほのめかした。そして、1881年、南部第一の新聞である『タイムズ・デモクラット』紙に文芸部長としてひきぬかれ、ゴーチェの翻訳集『One of Cleopatra's Nights (クレオパトラの一夜)』(1882)アラビア、インド、エジプトの伝説を集めた『Stray Leaves From Strange Literature (異文学拾遺)』(1884)、クレオール俚諺集『(Gombo Zhébes)』(1885)、『Some Chinese Ghosts(支那怪談)』(1887)を出版し、また、生涯にわたっての女友達となったエリザベス・ビスランドと知りあった。その後、1887年に新聞社を辞し、マルチニューク島で二年間を過ごし、その滞在時の記録が『Two Years in the French West Indies (仏領西インド諸島での二年間)』として1890年に出版された。しかし、ハーバー社の美術主任バットンの勧めで、ハーバー社の記者として1890年来日すると、チェンバレンと服部一三の紹介で松江中学校に英語教師として赴任した。その後、転任先の熊本第五高等中学校を辞し、1891年11月から『神戸クロニクル』社で新聞記者生活を送った。そして、東京大学長の外山正一の要請を受けて、1896年の秋から6年半にわたって、東京大学で英文学について詩を中心とした講義をおこなった。その間に、『Gleanings in Buddha-Field (『仏の畑の落葉)』(1897)、『Exotics and Retrospectives (異国風物と回想)』(1898)、『In Ghostly Japan (霊の日本)』(1899)、『A Japanese Miscellany (日本雑記)』(1901)、『Kottō (骨董)』(1902)、『Kwaidan (怪談)』(1904)等の著作を出版した。1903年3月に東京

大学を辞した後、1904年より、高田早苗学長の招きで早稲田大学へ出講したが、同年9月に亡くなった。

3. ハーンにおけるロバート・バーンズ

ロバート・バーンズはスコットランド南西地方のエア市に近い村アロウエイで、6人兄弟の長男として、貧農で厳格なカルヴァン主義の家庭に生まれ、小さいころから父を助けてオリファント、ロックリーなどの農場で激しい労働に従事した。そのかわり、彼は当時流行の文学作品、とりわけ、スコットランド民謡やロバート・ファーガソン(1750—1774)やアラン・ラムジィ(1750—1774)の作品を読みふけり、特に敬意を表わしていたファーガソンのためにはエジンバラに石碑さえたてたのである。やがて、村の娘たちへの恋心をスコットランド語を用いて詩にうたうようになった。1784年、父が亡くなると、弟のギルバートと共にモスギルで農場を始めたが失敗し、ついに、彼はジャマイカに仕事にでかけることを決心した。そして、その費用を工面するために、ジョン・ウィルソンが刊行を引きうけたので、1786年に『Poems, Chiefly written in the Scottish Dialect (詩集、主としてスコットランド方言による)』をキルマーノックで出版した。これによって、彼は天才詩人として認められて一躍有名になり、エディンバラ市の文化人の仲間入りをした。なお、これ以前にも『To a Mouse (はつかねずみに)』(1785)、一家団らんの喜びを歌った『The Cotter's Saturday Night (小屋住みの人の土曜日)』(1785)を書き出版している。

しかし、エディンバラではスコットランド文化が軽視されており、貧農出身の彼に対する階級的偏見が強いことがわかると、彼はエディンバラを去り、1788年に、長年の恋人ジーンと結婚してエリスランドに移り住んだ。

この頃の代表作としては、恋心を歌った『Of á the Airts (あらゆる方角のうちで)』(1788)、旧友再会の歌である『Auld Lang Syne (とおい昔)』(1788)、アロウエイ教会の魔女伝説をスコットランド語と標準英語を実に巧みに使って書いた民話的傑作詩である『Tam Ó Shanter (シャンター村のタム)』(1790)等がある。その後、再度、農場経営に失敗すると、1789年、収税史となり、1791年には、ダンフリースに移り、仕事に従事しながら雑誌などに投稿していたが、1796年に37歳で急死した。

ハーンは詩人として、バーンズは正規の教育を受けていないが、イギリス叙情詩の見方を変えた人であり、農民詩人として、また、民謡詩人として世界最

大の人であるとしている。そして、この理由として、彼は生まれ故郷の方言（スコットランド語）を用いて詩を書き、しかも、詩の中で取り扱っているものは、誰でも知っていることや感じていること——生きる喜び、畑仕事の辛さ、酒、恋愛、踊り、民主主義の精神、悪魔等——であり、さらに、これらの主題で、これまでのほとんどの詩人達が書かなかったような方法で、多くの人々の思想感情を、単純明快な方法によって、偉大な力と真実を持って書きあげたところに、彼の偉大さがあるとしているのである。また、バーンズを引きあいに出して、人間の価値は身分、肩書き、学問、知力で決まるのではなく、心のやさしさ——人柄——人間性が大切であるとしている⁴⁾。

ところで、阪田勝三氏は『バーンズ詩選』の中でバーンズの詩歌について「情熱と共に、彼の恋愛歌をより効果あらしめているのは、簡潔ということであろう。そこには煩瑣も洗練さもなければ、勿体ぶった上品さもない。或時は火焰となって燃え上り、或時は瀑布となって飛沫する。力強く忘れ難い言葉、一句の中に全感情がこめられている。」⁵⁾と述べている。

一方、規則や秩序を嫌い、支配や権威を憎み⁶⁾、詩歌を人間理想の結晶とも、人生の苦痛の圧力でできた金剛石とも言うべき物である⁷⁾と考えていたハーンは、このように、バーンズが多くの人々の思想感情を過去の因習に束縛されることなく、素直に、自然に、力強く歌いあげたところに感動しているのである。そして、そのことは、東京大学講師時代に詩を中心としたハーンの講義録にも見い出すことができる。

また、想像力を重視し、文学を情緒と情操の表現と見なす⁸⁾ハーンは、芸術家と教育の関係について、次のように述べている。

芸術家として物を見る能力は、教育とは縁のないものであって、教育とは関係なく涵養されねばならない。教育は大作家を作りだしてはいない。それどころか大作家は教育に関係なく偉大な作家となっているのである。教育の効果はあの原始的な感情を必然的に殺し、鈍くするものであるからだ⁹⁾。

さらに、芸術と教育について、次のように述べている。

ある有名な詩人や物語作家の言葉を諸君は覚えていて、諸君自身の感情

6

を表現するときにも、その言葉を用いることであろう。しかし、こういう言葉は諸君自身の感情を表現しないことも確実極まることだ。教育というもの一般にわれわれ自身の感情を表現するのに、他人の観念や言葉を用いることを、われわれに教えるものである。そして、この習癖は、芸術の一切の原理と全く反するものである¹⁰⁾。

つまり、ハーンは教育が芸術家になる条件ではないとし、それどころか芸術家にとって最も重要な感情を弱めてしまうものであるとしているのである。

このように、感性的背景と過去の境遇——ハーンが、とりわけ、同情を示した農民出身であり¹¹⁾、正規の教育を受けていなく、不幸な人生を送った——において、バーンズとハーンには共通点が見いだせると言えよう。

4. ハーンにおけるハーバート・スペンサー

スペンサーは父ウィリアム・ジョージ・スペンサーと母ハリエットの長男として、1820年にイギリスのダービーに生まれた。彼は父親の経営していた小さな私立学校に学び、さらに、13歳のときから3年間、父方の叔父トマス・スペンサー（ケンブリッジ大学出身）がヒントンで経営する小さな学校に通ったが、そこでは、数学、物理学、博物学の勉強に集中し、普通の教育の大部分を占める古典、語学、歴史の勉強はほとんどやらなかった。そして、正規の教育を受けなかった彼は、この二つの学校で、父よりエキセントリックな科学尊重の態度を、叔父よりエキセントリックな自由放任の思想をたたきこまれた。そして、産業革命による鉄道建設ブームのはじまった1837年、17歳のときから、ロンドン・バーミンガム鉄道の技師としての仕事に11年間にわたってたずさわった。その後、1848年に鉄道技師の仕事をしりぞいた後、当時、徹底した自由放任主義の編集方針をとっていたロンドンの『エコノミスト』誌（1843年創刊）の副編集長のポストについた。しかし、5年後、そのポストを辞し、著述家としての仕事に専従した。そして、1855年に処女作『Social Statics（社会静学）』、つづいて『Principles of Psychology（心理学原理）』を出版し、1857年、37歳になって「総合哲学体系」の計画をたて、1862年に『First Principles（第一原理）』、1864年から67年にかけて『Principles of Biology（生物学原理）』、1876年から82年にかけて『Principles of Sociology（社会学原理）』、1879年から93年にかけて『Principles of Ethics（倫理学原理）』、というように30余年の年月をかけてその計画を完成させ出版したのであった。

ところで、1881年にニューオリンズの有力新聞である『タイムズ・デモクラット』紙に文芸部長としてひきぬかれたハーンは、1882年10月8日の日曜版にスペンサーの著作である『社会学原理』の書評を書き、彼の思想にふれたのであった¹²⁾。しかも、1882年8月から11月にかけて、スペンサーは初めてアメリカを訪問しており、当時、アメリカでは、彼の思想はハーバード大学を中心として大きなブームをまきおこしており、彼に対する関心も大へん高かったのである。その後、ハーンは1885年7月にオスカー・テリー・クロスビー（合衆国海軍大尉）の熱心な勧めで『社会学原理』を再読した¹³⁾。

ハーンは当時の心境の変化について、1886年に『倫理学原理』を読んだ後、クレイビルに宛てて「自分ながら、考えの変ったことに驚いている。これまでの私の変な哲学は君の知っている通りである。この頃ある友人がハーバート・スペンサーを読むことを教えた。突然これまでの東洋哲学の研究は、全く時間の浪費であったことを発見した。……略言すれば『原理』を読んだその日から、全然新しい知力的生涯が私のために開いた。……」¹⁴⁾と述べ、さらに、オーコーナーに宛てて「スペンサーの研究で私の思想が根本的に変わった」¹⁵⁾と書いている。また、1887年4月にはビスランド女史に宛てて「ハーバート・スペンサーの著作は人間の知識や思想をまとめる力があり、非常に役立つので、読むことを勧めている。……スペンサーを読めば人間の知識の最も栄養ある部分を消化したようなものである」¹⁶⁾と述べている。

このようにして、ハーンはこれまでの思想を根底からくつがえされ、ものの考え方に大きな変化を意識したのであった。

そして、死の直前の1904年、アーネスト・クロスビーに宛てて「君と同姓の青年が20年前にハーバート・スペンサーの研究を教えてくれたのでクロスビーという姓の人に好意を表わしたい」¹⁷⁾と述べている。

これらのことから、当時、ハーンがいかにスペンサー哲学に傾倒し、その思想から大きな影響を受けたかを想像できるのである。

そこで、ハーンの著作をひもといてみると、スペンサーを引きあいだしているところが数多くみられる。

例えば、『日本——一つの試論』の「大乘仏教」において「わたくしはハーバート・スペンサーの学徒である」¹⁸⁾と述べている。『怪談』の「蟻」においては、スペンサーの進化論の影響の下で、蟻社会の中に人間社会の理想を見いだしている¹⁹⁾。また、『日本瞥見記 下』の「英語教師の日記から」においては学生の粗食問題にふれて、「人間の活力の大部分は肉体的にも、精神的にも、

食物しだいである。……」²⁰⁾と述べて、スペンサーの『教育論』の「体育論」からの説の引用と思われるところが見られるのである²¹⁾。また、東京大学講師時代の著作である『文学の解釈』の中でジョージ・メレデス(1828—1909)の『大地と人間』という作品はスペンサー哲学に従って道徳を説いているとして、次のように述べて賛同している。

あらゆる生物は生存競争に参加しなければならない。さもなければ、必らず滅亡する。生存競争で敗れるならば、自然は生命を奪いもする²²⁾。

善良であっても、その人が弱い人間であっては充分とは言えない。人間は善良であると同時に強くあらねばならない。しかし、善であることと強くあることのどちらがよいかと言えば、人間は強くあることのほうがよい。善はその次である²³⁾。

このように、ハーンは文芸部記者時代にスペンサーの思想にふれて以来、生涯を通して、スペンサーを師と仰ぎ、その思想の信奉者となったのである。

ところで、日本における最初のスペンサーの著作の翻訳は、明治11年(1878)に東京大学より出版された『代議政治論』(1857)であった。その後、明治29年(1896)まで、毎年のように彼の著作は翻訳出版され、多いときには年間5冊にものぼったのである。

このようにして、スペンサーの思想は日本でも歓迎されたのであった。

なお、日本に生物進化論が学問として輸入されたのは、明治10年(1877)に来日し、翌年まで東京大学で動物学の教師をしたエドワード・モース(1838—1925)によるものであった²⁴⁾。そして、このモースの進化論を補ったのは、明治11年来日したアーネスト・フランシスコ・フェノロサ(1853—1908)が東京大学で講義したスペンサーの社会進化論であった。この進化論の影響を強く受けた人物としては、東京大学の初代総長であり、明治の教育界におけるリーダーであった加藤弘之(1836—1916)がいる²⁵⁾。彼は、はじめは、ルソーの「天賦人權説」をとらえて民権運動の支持者であったが、明治10年代に、バックルの『英国文明史』と生物進化論によってその思想的立場を変更し、明治12年(1879)からは「天賦人權説」を否定し、自らの著作である『真政大意』(明治3年)や『国体新論』(明治8年)を絶版とし、明治15年(1882)に進化論を社会思想に導入した『人権新説』をあらわして、この立場から自然選択説

にもとついて強者が榮え、弱者が亡びるのを社会の原理とみなし、肯定するにいたり、民権思想を攻撃したのである²⁶⁾。

このように、弱肉強食・適者生存というスペンサーの思想は日本の指導者達にとって当時の富国強兵策という考え方に協力する理論として強力な武器となったのである。

5. ハーンにおけるダニエル・デフォー

ダニエル・デフォー（1660—1731）はロンドンのクリブルゲイトで肉屋を営んでいたジェイムズ・フォーの長男として生まれた。1684年、市内でメリヤス商を営んでいた彼は非国教会派の商人の娘であるメアリ・タフリーと結婚した。そして、1685年には王位継承をめぐる反乱に加わったとして投獄された。その後、政治関係のことにめりこみすぎたために商売の経営が不振にいたり、多大な負債をかかえて倒産した。そして、1694年には再びレンガ製造業をエセックス州で始め、大きな成功をおさめた。

1698年にはウィリアム三世の政策を支持する政治論文である『An Essay upon Projects (国策を論ず)』や『An Argument Shewing that a Standing Army (常備軍論)』等を発表した。つづいて、1701年には外国生まれの国王（ウィリアム三世）に対する一般の偏見を非難した諷刺詩である『A true-born Englishman (生粋のイギリス人)』を発表して一躍有名になった。さらに、1703年には宗教上の偏狭の愚かさを諷刺した小冊子である『The Shortest Way with the Dissenters (非国教徒撲滅策)』（1702）を発表したために治安防害という理由で再び逮捕、投獄されたが、トーリー党の政治家ハーリーのおかげで出獄した。そして、せっかく成功をおさめていたレンガ製造業の商売に失敗すると、1704年には自ら『レビュー』という週刊誌を創めて、ハーリーの政策を支持する記事を9年間にわたって書きつづけた。さらに、ハーリーがこの年に政権をとると数年間にわたって、彼は手先として働きスコットランドの併合問題に努力した。1706年には病死したヴィール夫人の幽霊が親友である某夫人のもとにあらわれたことを書いた小説である『True Relation of the Apparition of Mrs. Veal (ヴィール夫人の幽霊の物語)』、帝王神権説を諷刺した政治詩である『Jure Divino (神の掟によりて)』、さらに、1709年には『History of the Union (合同の歴史)』を出版した。1713年には『レビュー』誌にかかわって『マーケイター』という新聞を始め、1715年には『Family Instructor (家庭指導書)』出版した。そして、1719年には神を信じて困難にくじけることなく現実

をそのまま受けいれていくという人生観のために中産階級および下層階級の間で好評となった『The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner (ロビンソン・クルーソー)』を出版して、新しい写実小説家としての地位を不動のものにした。つづいて、『Memories of a Caralier (騎士の回想録)』(1720), 『Captain Singleton (シングルトン船長)』(1720), 神の摂理をといた『Serious Reflections of Robinson Crusoe (ロビンソン・クルーソーの反省録)』(1720)を出版したが、各種雑誌等への寄稿は欠かさなかった。その後、『Moll Flanders (モル・フランダース)』(1722), 『A Journal of tne Plague Year (ベスト)』(1722), さらに転変の生活を送る女性をえがいた小説である『The Fortunate Mistress or Roxna (ロクサナ)』(1724)を発表した。しかし、1730年に突然失踪し、1731年にロンドンで亡くなった。

ハーンはこのようなデフォーについて、彼の偉大なところは、文筆業とジャーナリズムを両立させたところにあるとして、イギリス散文学の傑作の一つとして彼の作品の一つである『ロビンソン・クルーソー』を取りあげて、これほどまでに真実にあふれた作品は英語が減びない限り、永遠に生き残るとしている²⁷⁾。

また、彼の作品の文体については、18世紀初頭の人とは思えないほど単純明快であり、純粋に飾り気のない英語を使用しており、その上、短かくて、きびきびした文章は散文の模範であるとしているのである²⁸⁾。

ところで、ハーンは自分の文体の目標について次のように述べている。

何年間も詩的散文を研究した後に、今では単純性を研究せざるをえなくなりました。一生けんめい装飾を試みたあげく、失敗によって転向せざるをえなくなりました。大きな目標は、平易な言葉を用いることです。それから、自分の文体がまだ固っていないように感じられます。——技功的すぎるようです。今後、一、二年勉強したら、もっと良くなるだろうと思います²⁹⁾。

さらに、ハーンは熊本第五高等中学校における英作文教育において、生徒が長い文章を好む傾向に気づくと、その反対の傾向を養うために、故意に短かく簡単に書かねばならないようなテーマを与えて書かせたり、自分で書いたりもした³⁰⁾。

このことに関しては、当時、同校の生徒であった白壁傑次郎も「五高におけるヘルン」の中で次のように述べている。

文章が自由に書ける様になるには二十年の努力を要する。文章を書くには推敲を要する。始め十語で表はし得た思想ならば九語か八語か尙少数の語で同じ思想を表わす様に骨折らねばならぬ。六文字綴りで置換へ得る語はないかと探さねばならぬ。ノットウイズスタンディングと言う様な恐ろしい語は出来る得るならば終生用いぬがよい。長綴りの語を用ふれば章句の締りが弛む。章句は出来る丈短かくせねばならぬと言う様の事でした³¹⁾。

このように、装飾を好まなかったデフォアの文体は、ハーンの目標とした文体——平易な言葉を使用し、短い文体であり、文全体が簡潔であること——と同じであるといえよう。

しかし、ここにはデフォアが二度にわたる事業の失敗や投獄という試練の後、ハーン同様にジャーナリズムの世界で仕事をやり、60歳近くになつて本格的に小説を書いたという彼の経歴に対してハーンが好意的であったことも見逃してはならないのである。

つまり、過去の境偶と文章の手法において、デフォアとハーンは共通点があると思われるのである。そして、それらが重なりあって賛同したものであろう。

おわりに

ハーンの経歴を顧みると、彼は両親の離婚により幼少期に資産家であった大叔母に引きとられたが、学費の提供者であった大叔母が事業に失敗したために、学校を中退するはめにいたった。しかも、ハーンは右目が強度の近視である上に、左目の失明というアクシデントにみまわれている。そして、1869年に19歳で渡米し、いろいろな職業を転々とした後、20年近くにわたって新聞記者、雑誌記者の仕事にたずさわり、1890年来日してからも教職と著作の仕事とを両立している。

ハーンは文体においては平易な言葉を使って飾り気のない短い文であり、文全体が簡潔であることを目標としたのであった。また、ハーンは東京大学時代の英文学史の講義においては文学を情緒と情操の表現とみなしたように感情

面を重視した。

ここで、バーンズ、スペンサー、デフォーの経歴、感性的背景、文体観を考えてみると、バーンズはハーンが、とりわけ、同情を示した貧しい農民出身であり、正規の教育を受けなかった。そして、感性面において、過去の因習にとらわれることなく感情を単純明快に作品の中にかいたあげている。また、スペンサーは貧しく、病弱であり、父の経営する小さな学校で短期間学んだだけで正規の学校教育は受けなかった。ジャーナリストとしての仕事にもたずさわった。さらに、デフォーも正規の学校教育は受けておらず、二度の事業の失敗と投獄を経験し、ジャーナリストの仕事にもたずさわった。そして、彼の文体はハーンの目標とした文体——単純明快であり、飾り気のない英語を使用し書き、その上、短い文章——であった。

このように、過去の境遇、感性的背景、文章観等において、ハーンはこれらの人物と重なりあう共通点がみられるのである。

従って、ハーンはこれらの人物に好意的な態度をとったものと推測できるのである。

注

- 1) 田部隆次『小泉八雲』、北星堂、昭和55年、36頁。
- 2) 平川祐弘「ハーンのロンドン時代」『小泉八雲とカミガミの世界』、文芸春秋、1988年、173-174頁。
- 3) Elizabeth Bisland 『The Japanese Letters of Lafcadio Hearn』, Scholarly Resources Inc, 1903年, p. 41.
『ラフカディオ・ハーン著作集14巻』(斉藤正二他訳)、恒文社、1983年、503頁。
- 4) 『ラフカディオ・ハーン著作集11巻』(野中涼・野中恵子訳)、恒文社、1981年、384-388頁。
- 5) 阪田勝三『バーンズ詩選』、新月社、昭和24年、288頁。
- 6) 『ラフカディオ・ハーン著作集11巻』、483頁。
- 7) 田部隆次『小泉八雲』、207頁。
- 8) Elizabeth Bisland 『Life and Letters』 Vo. III, Houghton Mifflin Company, p. 220.
- 9) 小泉八雲『人生と文学』(大田三郎訳)、河出書房、昭和27年、154頁。
- 10) 同上、152頁。
- 11) Lafcadio Hearn 『Japan』, Yushodo Booksellers LTD., 1982年, p. 506.
八雲会編『へるん』29, 恒文社、1992年、42-43頁。
- 12) スティーヴンソン『評伝ラフカディオ・ハーン』(遠田勝訳)、恒文社、1984年、163頁。

- 13) 同上, 201頁。
- 14) Elizabeth Bisland 『Life and Letters』 Vol. I, p. 371. (田部隆次『小泉八雲』参照)
- 15) 同上, p. 361. (同上)
- 16) 同上, Vol. II, p. 15. (同上)
- 17) 同上, Vol. III, p. 250. (同上)
- 18) Lafcadio Hearn 『Japan』, p. 232.
- 19) 『法政大学教養部紀要』73号, 1990年, 217-221頁。
Lafcadio Hearn 『Kwaidan』, Yushodo Booksellers LTD., 1981年, p. 215-240.
- 20) Lafcadio Hearn 『Glimpses of Unfamiliar Japan』 Vol. II, Yushodo Booksellers LTD., 1981年, p. 453.
- 21) ハーバート・スペンサー 『教育論』(三笠乙彦訳), 明治図書, 1969年, 186-187頁。
- 22) 『ラフカディオ・ハーン著作集 6巻』(池田雅之他訳), 恒文社, 1989年, 455頁。
- 23) 同上, 461頁。
- 24) 八杉龍一 『進化論の歴史』, 岩波書店, 1969年, 168頁。
- 25) 吉田光邦 『日本をきずいた科学』, 講談社, 昭和41年, 116頁。
- 26) 八杉龍一 『進化論の歴史』, 169頁。
『明治の思想と文化』(大久保利謙歴史著作集 6), 吉川弘文館, 昭和63年, 12頁。
- 27) 『ラフカディオ・ハーン著作集11巻』, 329-332頁。
- 28) 同上, 333頁。
- 29) Elizabeth Bisland 『The Japanese Letters of Lafcadio Hearn』, p. 62. (『評伝ラフカディオ・ハーン』参照)
- 30) Lafcadio Hearn 『Out of the East』, Yushodo Booksellers, LTD., 1981, p. 37-38.
- 31) 広瀬朝光 「五高に於けるヘルン」 『小泉八雲』, 昭和51年, 笠間書院, 185頁。

参考文献

- 1) 山下重一 『スペンサーと日本近代』, 御茶の水書房, 1983年。
- 2) 清水幾太郎 『コント・スペンサー』(世界の名著26), 中央公論社, 昭和55年。
- 3) 平井正穂・中野好夫 『世界文学大系15』, 筑摩書房, 昭和34年。
- 4) 野町 二・荒井良雄 『世界文学 シリーズ・イギリス 文学案内』, 朝日出版社, 昭和60年。
- 5) 難波利夫 『ロバート・バーンズ詩の研究Ⅱ』, 東洋出版, 1985年。
- 6) 『英米文学辞典』, 研究社, 1985年。
尚, ハーンの経歴についてはラフカディオ・ハーン 著作集 6巻(恒文社, 1989年)を主として参考にした。